

藤井克徳 著

私たち抜きに私たちのことを決めないで—障害者権利条約の軌跡と本質

高岡 徹（横浜市総合リハビリテーションセンター）

2014年10月に開催された第37回総合リハビリテーション研究大会において、著者の講演を聞く機会を得た。折よく障害者権利条約の批准と今後の制度改革と題された講演であり、著者の喜びと今後の決意を感じるとともに、私自身の理解を深めることもできた。

本書は税込み価格で1,000円というコストパフォーマンスの高い書物である。障害者権利条約の成立過程などが読みやすく書かれ、用語の解説（人物から法制度、組織など39項目）や、資料として「障害者の権利に関する条約」の全文と同条約批准までのあしあと（年表）もつけられており充実している。

障害者権利条約は、2001年11月10日、メキシコのフォックス大統領が国連総会の場でその制定を呼びかけたことから始まる。その後の議論を経て、2006年12月13日の国連総会で正式に採択された。そして批准国が20か国に達したのを受けて、2008年5月3日に発効となった。これら一連の審議において、障害当事者の参画が認められ、「Nothing About Us Without Us（私たち抜きに私たちのことを決めないで）」というフレーズが繰り返されたのだという。

日本は2007年9月に本条約の署名を行ったが、7年近くを経た2014年1月20日（批准書を国連担当部署へ提出した日）をもって141番目の批准国となった（参議院本会議での可決成立が2013年12月4日、発効日は2月19日）。

なぜ署名から7年もかかったのか？

障害者基本法や障害者差別解消法などの国内法の整備をまず行うことを先行させ、形式的な批准を防止するために、著者らが先頭に立ち、政府の批准に反対していたのだということである。「なぜ早く批准しないのか？」と私は不思議に思っていたのだが、本書を読んで己の不明を恥じるばかりであった。

本条約は今後の障害施策や問題の全体を方向づける上で最高の羅針盤となるであろう、と著者は述べている。一方、その内容は特別な、新しい権利を主張してはならず、マイナスを埋めること、格差の解消を目指していることも強調している。また、障害種別間の格差や男女間の格差、年齢の格差などをなくすことは今後の課題であり戦略であるとも述べて

いる。当たり前のことを当たり前に進めることに難しさがあると思わずにはいられない。

2014年は記念すべき年ではあるが、真の意味で意義ある年だったと将来思えるようにするためには、まだまだ行うべきことがあると改めて考える機会を与えてくれる書である。

「えほん障害者権利条約」（藤井克徳・著／里圭・絵）



2015年になり、著者である藤井氏による「えほん障害者権利条約」が新たに発行された。印象的な絵（版画？）と簡潔な文章で障害者権利条約の誕生から今後の方向性について描かれている。本質は前記の本と同様であり、子供にも分かるとされてはいるが、やはり少し難しい。この絵本は一人で読むよりも、大人が読み聞かせることによって、障害について一緒に考える時間をもつという利用の仕方がよいと思う。親子の会話のきっかけに、またわれわれの仕事の一端を理解してもらうためのツールとしても利用できそうである。ぜひ一度手に取って見ていただくことをおすすめする。

●私たち抜きに私たちのことを決めないで—障害者権利条約の軌跡と本質

（A5判、頁115 2014年 定価：本体1,000円＋税 [ISBN978-4-904185-27-8] やどかり出版刊）

●えほん 障害者権利条約

（AB判変 頁32 2015年 定価1,500円＋税 [ISBN978-4-81132-186-8] 汐文社刊）